

むくのきだより



3月号

平成29年3月1日

港区立赤羽幼稚園長

小鹿原

賢

子どもと寄り添う

園長 小鹿原 賢

修了・卒業の3月を迎えます。

園庭・校庭を見ると先生たちが、子どもと一緒に遊んでいたり縄跳びを教えていたりしています。学級で子どもと過ごす最後の学期を惜しむかのように、子どもとのかかわりを楽しんでいます。

この光景を見ると思い出すのは私の小学校時代のことです。



鉄棒が大の苦手な私は、6年生になっても逆上がりができませんでした。みんなの前でできない姿をまた見せるのかと、憂鬱でした。私は、自力で何とかできるようになろうと、夜、鉄棒がある公園で逆上がりの練習をすることにしました。しかし、一人の練習はたやすいものではありません。教えてくれる先生がいない、しかも街灯が一つだけ点いている公園で薄暗くて動きがよく見えません。

何日も練習しましたが、そのうち学校の鉄棒の授業は終わってしまいました。もう練習しなくてもいいわけですが、せっかく取りかかったことですので、辞めたくなかったのです。わたしは、練習を続けることにしました。



しばらく続けていると、あるとき、くるっと一回、逆上がりができました。「んっ。これかな」もう一度やってみましたら、次もできました。そして次も…。私は、一人ガッツポーズをとり喜びました。できることがこんなに嬉しいことなのかとも思いました。しかし、周りを見回すと誰もいません。共に喜んでくれる人がいない侘しさも感じていました。

私が教員を志した、しかも体育を専門とする教員を目指した理由には、このような子どもの頃の体験や経験が大きいように思います。「子どもができないことをできるようにする。」「子どもと一緒に喜んで喜ぶ。」子どもに寄り添うことができる先生になろうと努力しました。

先生になってから25年の月日が経ち、私の初めての教え子たちのクラス会が開かれ、私は招待されました。その中の一人の教え子から、次のような言葉をもらいました。「私は、跳び箱が跳べず苦手でした。そんな私に先生は放課後にできるまで何回も教えてくれました。先生が熱意と誠実さと公平さをもって教えていたお姿に子どもながら感動していました。今、私の人生・生活の基盤の一つです。私も留学生等を教える日本語の教師をさせていただいていますが、このスピリットを忘れずにいようと心がけております。」帰り際、教え子はこの言葉をカードにして、私に渡しました。

2年前赤羽の子どもたちと出会ってから、子どもたちの頑張りや活躍が嬉しく、自分の勤めている学校・園の子どもを自慢できるまで、子どもが成長したことを幸せに思います。これも、子どもを励まし学校・園の教育を応援してくださる保護者や地域の皆様のお蔭であると感謝申し上げます。

また、「あいさつ・礼儀」や「学びの姿勢」づくりを重視した教育の実現を、本校・園の教職員が努力して取り組んでくれました。

「教育は人なり」とよく言われますが、一人だけではできないものです。教職員・保護者・地域が一つになって「和」をつくり教育を進めていくことで、子どもがたくましく健やかに育っていくのです。

「子どもに寄り添う先生として、どれだけできたのか…。」自分自身を振り返り、3月の修了・卒業を子どもと共に迎えたいと思います。

